岐宿町文化財調查報告書 第2集

寄神貝塚周辺遺跡

1990

長崎県岐宿町教育委員会

# 発刊にあたって

五島岐宿町は『貝塚のまち』といわれるほど貝塚の多い町ですが、 昭和38年には、現在長崎県の史跡として指定されている弥生時代の 『寄神貝塚』が発掘調査されました。

次いで昭和47年には『鰐川貝塚』が発掘調査されましたが、県下 には数少ない縄文中期の遺跡であったことが確認されました。

私どもとしては、もっと古い時代の遺跡がありそうな気配を感じておりましたが、昭和59年の県営畑総事業にかかる分布調査の際、今回報告の遺跡が発見されました。旧石器時代の遺物を含む縄文時代の遺跡ということですが、特に旧石器の遺物は、五島福江でも数少ない貴重なものだと聞いております。

町民のひとりとして、そんなに遠い時代に人が住んでいた「ふる さと」であったのかとあらためて誇らしく思いますし、また感慨深 いものもあります。

この報告書が、文化財保護と郷土を知るうえで、一助となれば幸いと存じます。

今回の調査を担当していただいた県文化課をはじめ、御協力いた だいた地主の方々、関係各位の皆様に対して心より深く感謝申し上 げます。

平成2年3月31日

岐宿町教育長 山 中 義 男

# 例 言

- 1. 本書は、平成元年度の国および県費補助を受けて実施した、長崎県南松浦郡岐宿 町岐宿郷榎津に所在する寄神貝塚周辺遺跡の範囲確認調査の報告書である。
- 2. 調査は、岐宿町教育委員会が調査主体となり、長崎県文化課が調査を担当して、 平成元年9月4日~9月13日(10日間)に実施した。
- 3. 調查関係者

岐宿町教育委員会 山中 義男 教育長

中島冨喜人 事務局長

柳田 勲 総務係長 (現. 町長部局水道課長)

長崎県教育庁文化課 安楽 勉 主任文化財保護主事(調査担当)

小野ゆかり 文化財調査員 ( リ )

4. 本書は、分担して執筆した。

II-1 ⋅ 2 安楽

 $I-1\cdot 2$ ,  $II-3\sim 5$ , III 小野

- 5. 出土遺物については、岐宿町教育委員会が保管の任にあたっている。
- 6. 本書の写真撮影は安楽,作図・編集は小野による。

# 本文目次

I 遺跡	の立地と環境
1. 计	跡の立地
2. 歴	史的環境
II 調	查4
1. 彩	緯4
2. 割	查概要
3. ∃	層
4. 道	物
(1)	石 器
(2)	土 器
5. 屿	宿町内表面採集資料の紹介13
Ⅲ ま	ک ه <u>16</u>
	挿 図 目 次
第1図	岐宿町位置図
第2図	周辺の遺跡
第3図	調査区配置図( 1 /900) 5
第4図	土層断面図(1/40)
第5図	出土石器① (2/3)9
第6図	n ② ( n ) ······10
第7図	n ③ ( n ) ······11
第8図	η ④ (1/2) ·····12
第9図	" ⑤ (1/3)・押型文土器片 (1/1)13
第10図	· 据房町内丰面採售资料 (1/9)

# 表 目 次

表1 出	出土石器計測表14
	図版 目次
図版 1	遺跡遠景(城ノ岳より)・遺跡近景(北より)・C-4区北壁17
図版 2	出土石器 (2/3)18
図版 3	出土石器 (2/3)19
図版 4	出土石器 (1/3)・出土土器 (2/1)20
DATE =	   古字町内丰西邨集次料

# I 遺跡の立地と環境

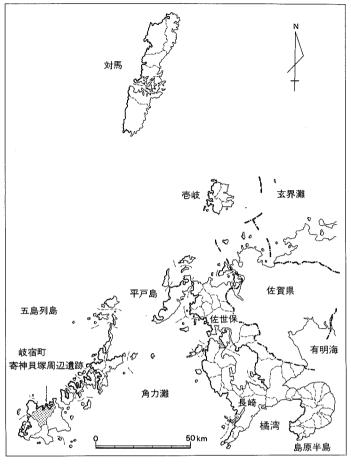
## 1. 遺跡の立地

本遺跡の所在する岐宿町は 五島列島福江島の北部に位置 し、東を福江市、南から西に かけてを富江町・玉之浦町・ 三井楽町の3町と隣接してい る。北は東シナ海に面し、リ アス式海岸は、岐宿湾や水ノ 浦漁港などの良港を形成して (世) こ。

本遺跡は、この2つの漁港に挟まれた溶岩台地上の北端に位置する。標高は16m前後と低平で、半島状に海に突き出た台地は、殆どが畑地として利用されている。

## 2. 歷史的環境(第2図)

今回発掘調査された寄神貝 塚周辺遺跡(12)は、昭和40年 代に地元の研究家によって発



第1図 岐宿町位置図

見された遺跡である。福江島では珍しい旧石器時代の遺物が採集され、今回の調査では2点出土した。また旧石器時代と思われる遺跡は、岐宿湾の西岸部に立地している茶園遺跡(6)があり細石核が表面採集されている。島内では他にも、尖頭器・ナイフ形石器・細石核などの資料が報告されており、徐々にではあるが旧石器時代の資料も増えつつある。

縄文時代の遺跡としては,鰐川貝塚(22)があげられる。昭和47年の発掘調査で,縄文時代中期~後期の遺跡であると確認されたが,今は採石のため消滅している。それ以外にも水ノ浦漁港の北,魚津ケ崎付近の溶岩台地上に立地する長崎遺跡(13)からは,石鏃やサヌカイト製の石匙などが表面採集されており縄文時代の遺跡として周知されている。現在わかっている町内の遺跡の多くは縄文時代のもので,特に後期の遺跡・遺物は五島列島全体で見ても多い。

弥生時代を代表する遺跡では、前期~中期にかけて形成された寄神貝塚(11)が広く知られている。本遺跡から小谷を挟んで、南東に僅か400m程しか離れていない。岐宿湾に東面する標高

約20mの低平な溶岩台地上に立地し,厚い貝層の堆積を持つ。昭和37・38年には,九州大学の鏡山猛先生らによって発掘調査され,弥生土器・石器・骨角器・貝製品など様々な遺物が出土している。遺構も,竪穴式住居址・平地式住居址・人骨と獣骨が混じった土壙などが検出されている。これらは長期間にわたっての定住と漁労生活を物語っている。この遺跡は昭和37年には,県指定史跡になっている。

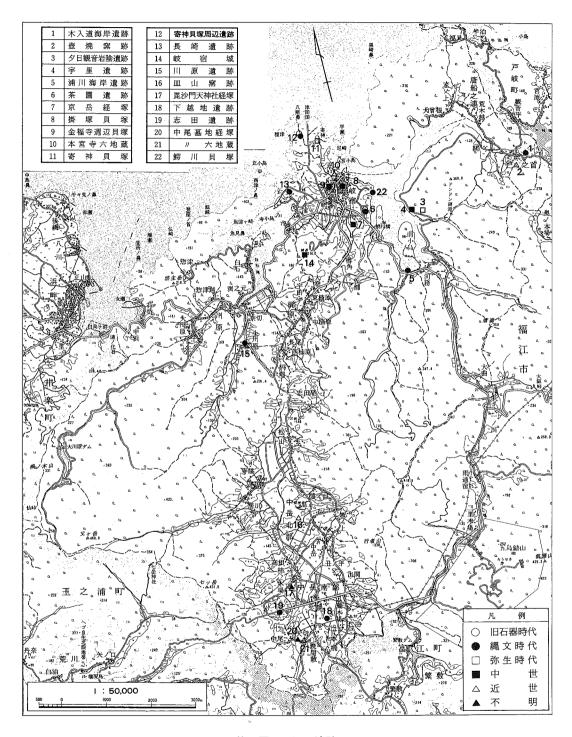
古墳時代においては、岐宿町だけではなく五島列島でも不明な点が多く、高塚古墳は小値賀島で確認されているのみである。福江島でも須恵器片の散布している所が数箇所といった程度で今後、新資料の出現などにより空白部分の解明が待たれる。

岐宿町における中世の遺跡は、散布地・経塚・貝塚・城跡等がある。特に貝塚は先に述べたように、縄文時代の鰐川貝塚(22)や弥生時代の寄神貝塚(11)など時代によっての好資料もあり掛塚貝塚(8)や金福寺周辺貝塚(9)等の中世のものを加えて、貝塚形成の時代的変化を見るのも面白いかも知れない。

また岐宿城跡(14)は、岐宿町の北部にある城ノ岳(216.0m)にあり、その平になっている頂部に本丸の痕跡を留めている。北方には低平な溶岩台地と複雑なリアス式海岸が広がり、その向こうには東シナ海が望める。また東には岐宿湾、西には白石浦が深く湾入し自然の要害になっている。南は行者山(338.6m)や交ヶ岳(460.0m)をはじめ山々が続き、岐宿城の存在もうなずける環境にある。昭和54年の発掘調査では石塁・出曲輪・木戸口跡・溜池遺構などが確認された。築城主などの詳細について、文献・記録は皆無に等しいが、宇久氏が現在の北松浦郡宇久島・小値賀島一帯を支配し、後年福江島に進出した折に城ヶ岳に築城したのではないか、という説が有力である。なお、築城年代は永徳3年(1383年)頃、築城主は宇久氏8代覚が比定されている。

近世になると五島藩領となり、岐宿村の崎野には遠見番所が置かれた。川原郷および浦の川には材木の集散のため堪場を設置し、楠原・十二河には藩の牧場が置かれて馬を放牧した。遺跡は、六地蔵や壺焼窯跡(2)・皿山窯跡(16)などがある。

- 註1 瀬野精一郎他『角川日本地名大辞典42 長崎県』 角川書店 1987
  - 2 下川達彌「日本最西端の旧石器資料」『考古学ジャーナル10月号』167 ニュー・サイエンス社 1979他
  - 3 正林 護「鰐川貝塚」『長崎県埋蔵文化財調査集報V』 長崎県文化財調査報告書 第57集 長崎県教育 委員会 1982
  - 4 鏡山 猛「岐宿貝塚」『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書 第二集 長崎県教育委員会 1964
  - 5 正林 護他『岐宿城遺跡確認調査報告書』 岐宿町文化財調査報告書 第1集 岐宿町教育委員会 1982



第2図 周辺の遺跡

## II 調 查

#### 1. 経 緯

五島列島福江島に位置する岐宿町は福江市の西側に隣接し、北部の水産業と南部の農業が主な産業の町である。

昭和57年、町では農業振興策として水産資源の確保と、農道網、圃場整備を目的に、岐宿地 区県営畑地帯総合土地改良事業が計画された。概要は、畑270ha、水田80haの受益地を対象に、 かんがい用ダムの建設や区画整理等を実施するもので、完成は平成5年度を目標としている。

県文化課では以上の計画に基づいて県耕地課から協議を受け、分布調査の必要を回答した。 分布調査は昭和61年6月23日~26日にわたり五島支庁耕地課、岐宿町経済課、町教育委員会、 県文化課の4者によって実施した。

当初,事業予定地内には周知の遺跡として,(1)茶園遺跡,(2)京岳経塚,(3)寄神貝塚周辺遺跡の遺跡があげられ,低触する遺跡として金福寺周辺貝塚と寄神貝塚の2遺跡があげられていた。調査の結果では,京岳経塚と金福寺周辺貝塚は計画から除外されていたため問題はなかった。寄神貝塚については県指定史跡ということもあり地区除外することになった。また,新規発見の遺跡として楠原地区に地獄川遺跡が追加された。

その後も遺跡保護の立場から設計変更が出来ないものか協議を行なったが、地獄川遺跡と寄神貝塚周辺遺跡については工事に先立って範囲確認調査を実施することになった。前者については、昭和63年5月に文化庁長官と農林省構造改善局長による覚書第5項によって調査を終了した。本遺跡については、第4項により国と県の補助金を受けて実施した。

調査は岐宿町教育委員会が調査主体、県文化課職員2名が調査担当者となり、平成元年9月4日~13日まで行なった。結果は、畑の表面から多くの遺物が採集されたにもかかわらず、ほとんどが無遺物層であった。そのため事業の実施については着工可能である旨を関係者あてに通知した。

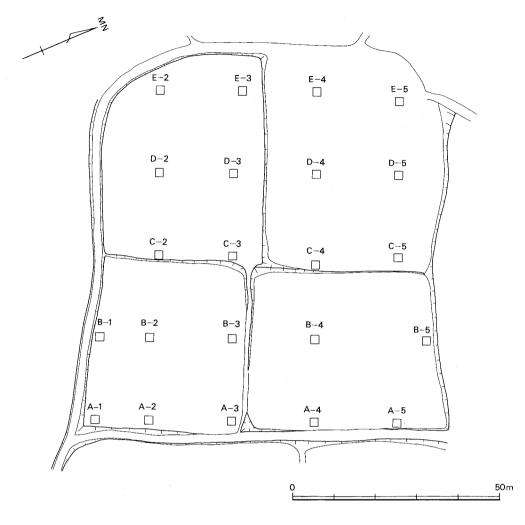
本報告は以上の経過と調査の結果を記録したものである。

#### 2. 調査概要(第3図)

調査は詳細分布調査の結果, 黒曜石剝片類が多く散布している地区, 約5000㎡について調査 区を設定した。標高は約16m前後である。

 $2 m \times 2 m$ の調査区を西から東へ傾斜している畔に沿って22箇所設定した。南から北へ1・ $2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5$ ,東から西へ $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E$ と記号を付した。

調査の結果はA-3区、A-4区で土層の堆積が深く、前者からは石皿が出土した。旧地形は、浅い谷状であったことを示している。D-3区II層からはナイフ形石器が1点出土した。全体的には層が浅く、遺物包含層は認められなかった。表土層や表面採集では、旧石器時代の



第3図 調査区配置図(1/900)

細石核,縄文時代の石鏃や銛先,スクレイパーなどが得られたが,包含層はほとんどが削られている状況であった。

# 3. 土 層 (第4図)

寄神貝塚周辺遺跡は,東シナ海に突出する溶岩台地上に形成されており,岐宿湾と白石浦が挟み込むように深く湾入している。標高は16m前後でその多くは畑地として利用されている。そのためか土地はかなり耕作され,今回の調査では確実な遺物包含層は確認できなかった。しかし, I 層や表面には多くの遺物が散布し,遺物包含層が存在したことをうかがわせる。土層の状況は次のとおりである。

I層;黒褐色土層 耕作土で20~40cm位の厚さ

I/層;茶褐色土層 攪乱層で西から東へ向かって厚く堆積

II層;赤褐色粘質土層 遺物包含層?A-3区石皿1点,D-3区ナイフ形石器1点出土

III層;赤褐色バイ乱土層 白色玄武岩風化土粒混在の地山層

また、調査区の深さは、最も深いものでA-3区・A-4区の約1.2m、浅いものでE-2区・A-5区などの約0.4m程度である。土層から考えられる旧地形は、西側から東側に傾斜する浅い谷状であったと思われる。

#### 4. 遺物

今回出土した遺物は、石器・剝片が164点、土器片が1点、陶磁器片が130点の合計295点である。石器はナイフ形石器・細石核・石鏃・スクレイパー・石銛・石槍・石核・石斧・たたき石・石皿などで数は多くないが器種が豊富である。剝片は黒曜石のものが多いが、玄武岩の剝片もかなり見られる。土器は山形の押型文土器の破片が1点のみ表面採集された。陶磁器片は130点と点数は多いが全て細かい破片である。接合や復元できる資料は皆無であるが、中には中国製陶磁器片や染め付けの破片なども数点混じっている。

ナイフ形石器と石皿の2点を除く全てが $I \sim I'$ 層からの出土か表面採集資料であり、遺跡の時期の決定や遺物包含層の存在についての詳細を極めることは難しいが、五島列島福江島において旧石器時代の遺物を提示出来たことの意味は大きいと思われる。また、出土した銛先や石槍のなかにも縄文時代を代表する特徴を持った好資料もある。

#### (1) 石器(第5~9図)

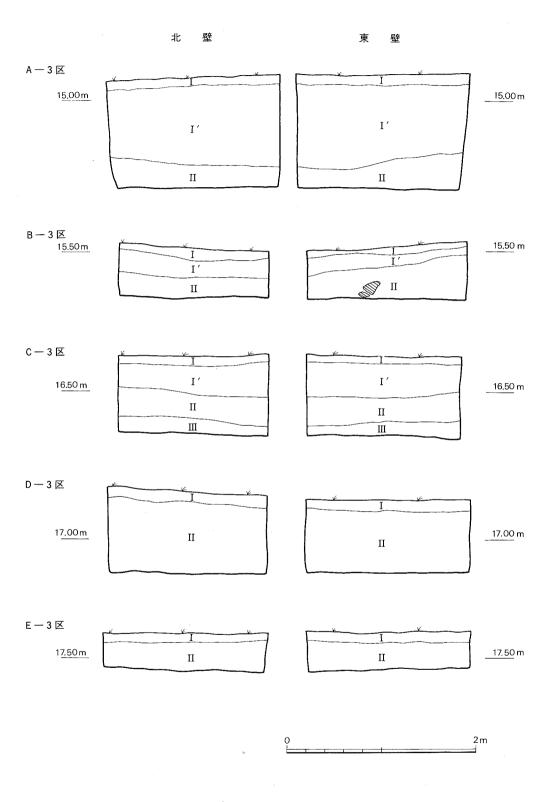
寄神貝塚周辺遺跡の出土遺物は、ほとんどが石器である。内訳は、剝片石器152点、礫石器12点、合計164点である。剝片石器の内訳は、石鏃22点、スクレイパー13点、加工痕ある石器 6点、使用痕ある剝片 4点、石銛 3点、石槍 3点、石核11点、ナイフ形石器 1点、細石核 1点、不明石器 4点、剝片84点である。中でも剝片が多く55%以上を占めている。礫石器では石斧 3点、たたき石 4点、石錘 1点、石皿 1点、砥石 3点で合計12点である。なお、ここでは出土した164点の石器から45点を選び図示した。

#### ナイフ形石器(1)

D-3区II層の出土。青灰色黒曜石製で完形である。五島列島の特に福江島では資料としても少なく、旧石器時代を知るうえで貴重である。ここで出土したナイフ形石器は、剝片の刃部を一部残し、二側辺に刃潰し加工を行なっている典型的なものである。表面の一部には自然面が残る。裏面は基部に小剝離が僅かにみられる。

#### 細石核 (2)

表面採集資料である。一部に自然面を残しているが、左側面には、主要剝離面がみられる。



第4図 土層断面図(1/40)

打面調整も行なわれており、左側辺からの打痕が顕著である。剝離面からみると、幅  $2\sim3\,\mathrm{mm}$ 、長さ  $2\,\mathrm{cm}$ 程度の短い細石刃が剝離されている。

#### 石 鏃 (3~18)

3は剝片鏃,5は一般に鍬形鏃と呼ばれているもので,U字形の大きな抉りと角状の脚部をもつ凹基無茎鏃である。縄文時代早期の指標的な石鏃とされている。押型文土器に伴うことが多く今回の調査でも小さな押型文土器片が表面採集されている。風化が著しい。4は半透明の黒曜石製で非常に丁寧に剝離調整が行なわれており、特に縁辺部の微調整は細かい。10~13は側縁に緩い段があり、抉りは浅く、先端は細長く斜めに伸びている所まで非常に類似している。14~17は厚みがあり大形。18は唯一の円基鏃である。

#### スクレイパー $(19\sim22)$

19・20はほぼ四角形, 21・22は三角形をしている。 4点とも一辺は折断面を呈している。

#### 加工痕ある石器 (23~26)

23は上辺と下辺、24~26は一側辺にそれぞれ加工痕がみられる。

#### 使用痕ある剝片 (27~29)

黒曜石製で、小さな厚みのある剝片を使用。それぞれ一部に自然面が残っている。

#### 石 銛 (30~32)

30は一般に「製の頭形石器」と呼ばれているもので、三角形の先端部と、それに続く両側辺で形成される肩と、舌状の基部から成る。玄武岩製で風化が著しい。31は肩を有さず、基部にいくにしたがって自然に細くなっている。32は調整がやや荒い。石槍の可能性もある。

#### 石 槍(33~35)

33は先端部と基部が破損しているが典型的な石槍で「面的な調整剝離と,周辺の微細な調整 剝離によって,尖頭部と茎部が作出された,断面が凸レンズ状をなす石器」である。34・35は 基部と考えられ,35については厚みのある石匙という可能性も否定できない。

#### 石 核 (36・37)

 $36 \cdot 37$ は自然面が多く残る石核で、大きさ自体は、ともに  $3 \sim 4$  cm程の比較的小さな原石。

#### 石 斧 (38~40)

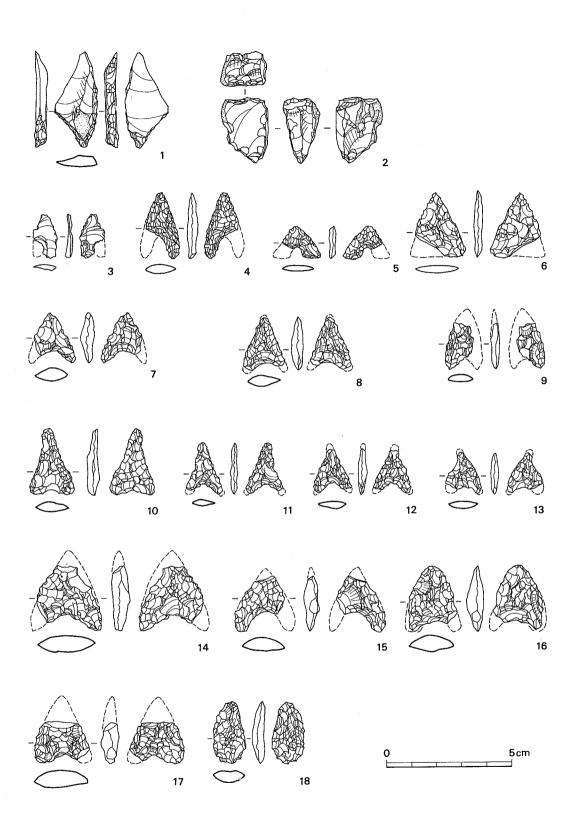
38は砂岩製で風化が著しく磨きの状態などの観察が難しい。しかし、剝離は先端部にしか見られず、おそらく磨製石斧と考えられる。39・40は安山岩製の磨製石斧である。39は完形であり、磨きが全体におよぶ直刃の両刃石斧である。40は先端部を僅かに残すのみであるが、一般に蛤刃と呼ばれている両刃石斧である。

#### 石 錘 (41)

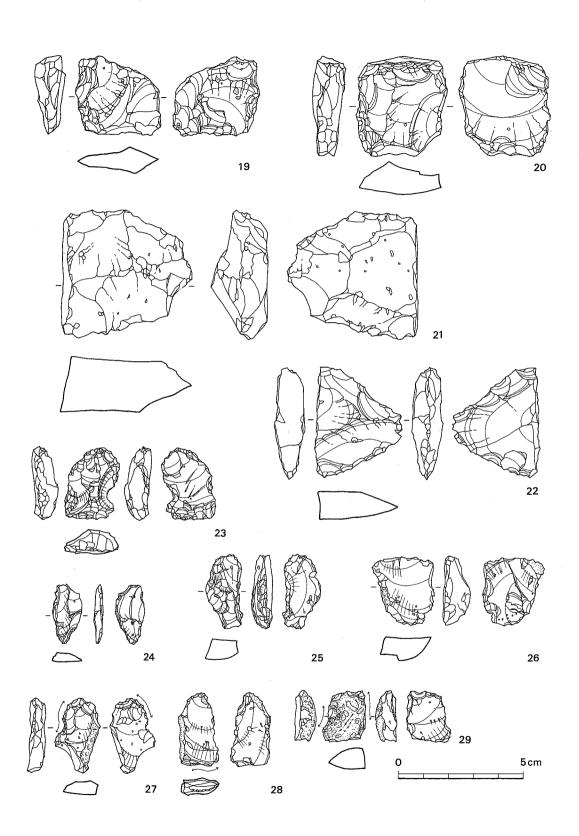
上・下辺を簡単に加工したもの。

#### たたき石 (42~44)

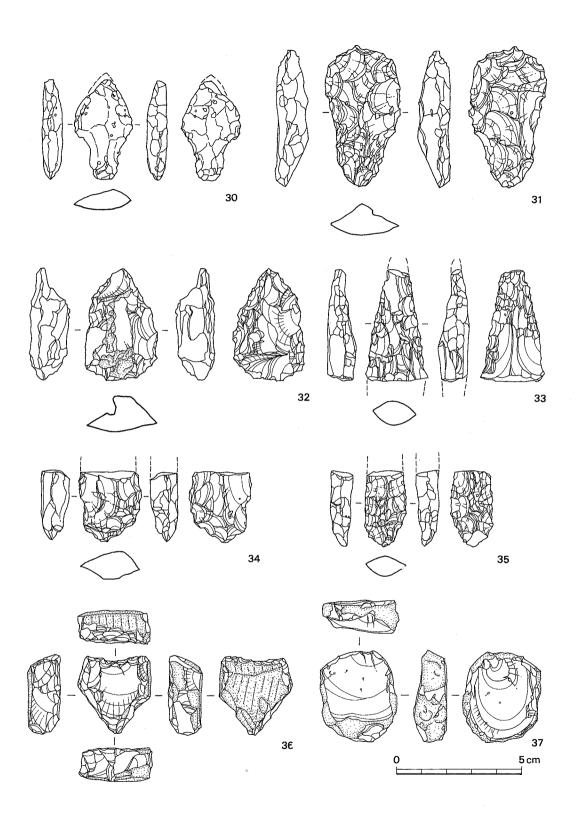
42は小さな石斧の可能性もある。43・44は破損している。



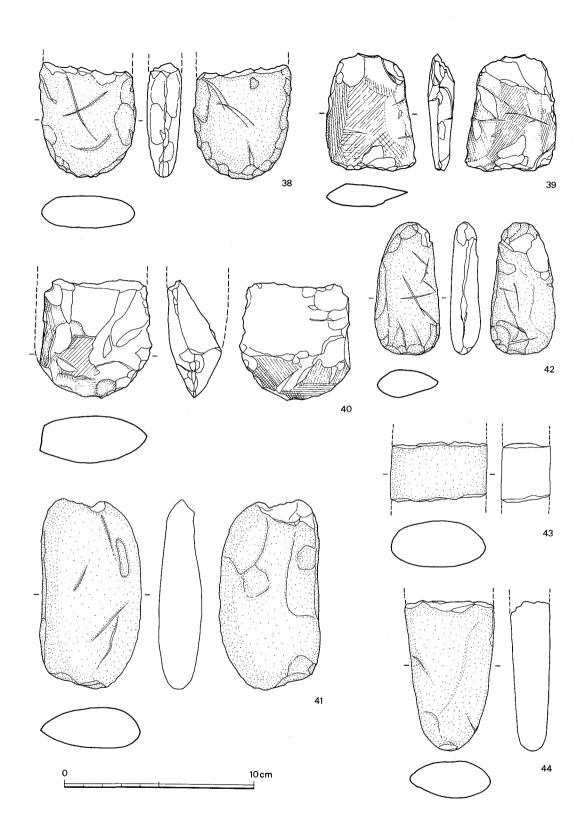
第 5 図 出土石器①(2/3)



第6図 出土石器②(2/3)



第 7 図 出土石器③(2/3)



第8図 出土石器④(1/2)

#### 石 皿 (45)

 $A-3 \boxtimes II$ 層より出土した。砂岩製で一部が破損している。

註6 鈴木道之助「石鏃」『縄文文化の研究7』 雄山閣 1983

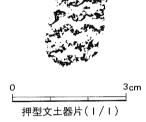
7 砂田 佳弘「石槍」『縄文文化の研究7』 雄山閣 1983

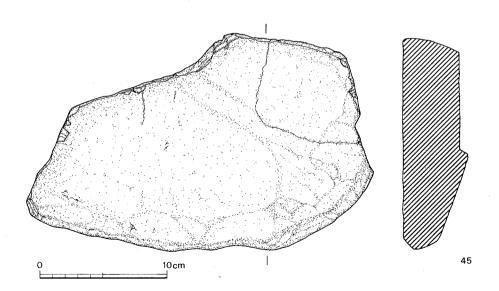
### (2) 土 器

今回の調査で唯一の出土土器片。表面採集資料である。小片であり風化も著しいが、文様が 観察でき、また五島列島では珍しい押型文土器であるので掲載した。胎土は、荒い石英粒の他 に雲母・貝殼などが混入され、色調は橙色である。文様は山形の押型文が施文されているが、 あまりに小片なため原体の大きさ・施文の方向等も全く不明である。他に現在わかっている五 島列島の押型文土器の例は、岐宿町茶園遺跡・富江町黒瀬遺跡・福江市白浜貝塚・皆塚遺跡な ど僅かである。

## 5. 岐宿町内表面採集資料の紹介(第10図)

ここでは,五島列島における考古学などの研究の一助となるように,岐宿町内で表面採集された未発表の資料を少しであるが紹介したいと思う。  $1 \sim 18$ は昭和61年に現岐宿町教育長である山中義男先生が表面採集されたものである。採集地

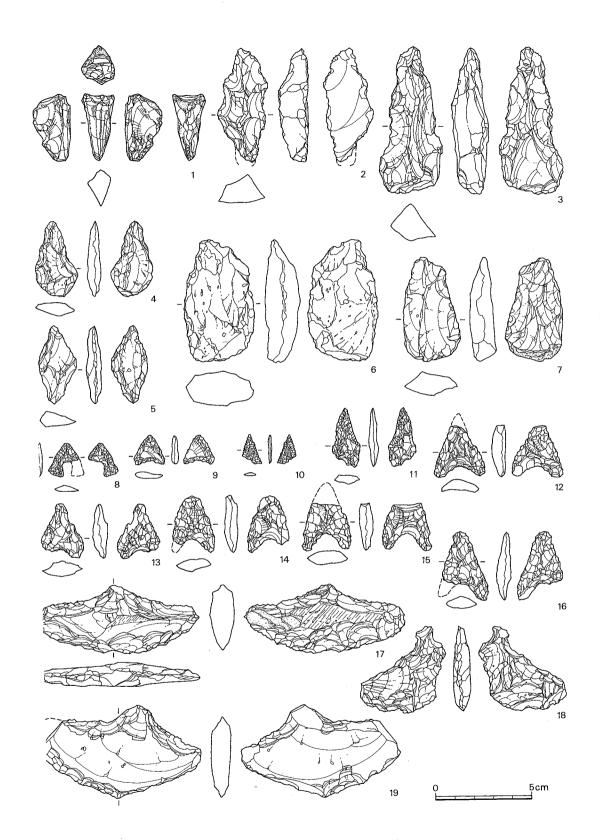




第9図 出土石器(5)(1/3)

- 12	¢ Ι <u>Ι</u> Ι		口台门侧公	• 					(単位 cm・g)
番号	出土区	層	石 質	器 種	長	幅	厚	重量	備考
1	D-3	II	青灰色黒曜石	ナイフ形石器	3.8	1.7	0.6	2.6	
2	表 採		黒色黒曜石	細 石 核	2.7	1.8	1.4	6.7	
3	11		n	石 鏃	1.8	<0.9>	0.2	<0.2>	剝片鏃か?
4	n		n	11	2.6	⟨1.3⟩	0.4	<0.9>	透明度の高い石質 片脚破損
5	"		青灰色黒曜石	11	1.3	<1.6>	0.2	⟨0.3⟩	パテナあり 片脚破損
6	A-3	I	n	"	2.6	<2.0>	0.3	⟨1.3⟩	平基無茎鏃? 一部破損
7	表採		"	11	2.1	⟨1.6⟩	0.5	<1.0>	片脚破損
8	· 11		玄 武 岩	n	⟨2.1⟩	<1.7>	0.4	<1.3>	風化が著しい
9	n		黒色黒曜石	11	⟨1.8⟩	<1.0>	⟨0.4⟩	<0.6>	二次加工がみられる
10	"		青灰色黒曜石	11	2.6	1.7	0.5	1.6	調整は荒く, 先端部もいびつ
11	"		"	11	2.1	⟨1.4⟩	0.3	<0.5>	n
12	n		"	11	<1.8>	<1.5>	0.4	<0.6>	"
13	"		11	" "	⟨1.6⟩	⟨1.4⟩	0.3	<0.5>	"
14	11		11	11	⟨2.6⟩	⟨2.5⟩	0.7	⟨3.6⟩	大形 先端部・片脚破損
15	"		"	11	⟨2.2⟩	<2.0>	0.6	<1.6>	抉りが深く大形 〃
16	"		黒色黒曜石	11	⟨2.6⟩	<2.0>	0.7	⟨2.8⟩	大形 パテナあり 片脚破損
17	n		"	))	⟨1.7⟩	<2.2>	0.7	(2.2)	ル 先端部・片脚破損
18	"		"	"	2.5	1.3	0.5	1.5	円基鏃
19	11		玄 武 岩	スクレイパー	3.2	3.4	1.2	15.0	三辺を両面より加工している
20	"			"	4.0	3.6	1.5	23.0	一辺を両面より加工している
21	"			"	5.2	5.2	2.3	68.0	側縁を両面より加工している
22	. "		"	"	4.5	3.5	1.3	18.0	"
23	"		黒色黒曜石	加工痕ある石器	2.9	2.1	1.1	5.2	丁寧な加工
24	D-5	Ι		"	2.3	1.2	0.4	0.9	小形の剝片を使用
25	表採			"	3.0	1.5	0.8	3.8	一側辺に丁寧な加工
26	D-5	Ι		<i>))</i>	2.7	2.5	1.1	5.6	
27	表 採		"	使用痕ある剝片	3.0	1.8	0.7	3.2	
28	<i>n</i>		<i>"</i>	"	2.9	1.6	0.6	3.1	0 = 1 de 30
29	"		<i>"</i>	<i>"</i>	2.0	1.7	0.9	3.2	パテナあり
30	<i>))</i>		玄 武 岩	石 銛	4.0	2.3	0.8	8.0	風化が著しい
31	1)		<i>リ</i> 青灰色黒曜石	וו	5.5	3.0 2.9	1.3	22.0	基部にいくに従って細くなっている 加工は荒い 石槍の可能性もある
33	"		玄 武 岩		4.5 <4.5>	(2.5)	1.6	16.0	ルルユペルマュー 石畑の刊記注もある
34	"		<u> </u>	/山 //B //	(2.8)	(2.5)	(1.1)	(9.0)	Walter Water Commencer Com
35	"		"	"	(3.0)	1.6	1.0	(5.0)	石匙の可能性もある
36	"		灰色黒曜石			2.9	1.3	16.0	日ンテン・2001年 0 め、の
37	"		青灰黒曜石	, ))	3.7	3.0	1.3	16.0	
38	"		砂岩	石 斧	⟨6.1⟩	⟨5.2⟩	⟨1.8⟩	(88.0)	   風化が著しく,研磨は確認できない
39	C — 5	I	安山岩	"	6.2	4.8	1.4	52.0	磨製石斧 直刃
40	D-5	I	"	"	⟨6.3⟩	⟨6.0⟩	(2.7)	<100.0>	ル 蛤刃
41	C-5	I	砂岩	たたき石	7.1	3.4	1.6	50.0	小形の石斧の可能性もある
42	A-3	I'	"	"	⟨3.0⟩	5.1	2.7	⟨72.0⟩	
43	A-5	I	))	"	⟨8.0⟩	⟨4.7⟩	⟨2.1⟩	(105.0)	
44	表採		安山岩	石 錘	10.2	5.4	2.3	178.0	簡単な加工
45	A-3	II	砂岩		⟨16.8⟩	⟨27.6⟩	<4.5>	(2920.0)	1.7

※〈 〉は実数



第10図 岐宿町内表面採集資料(1/2)

は岐宿郷榎津で本報告書の寄神貝塚周辺遺跡にあたる。また19は、長崎県文化課が周知事業の一環として昭和59年度に行なった分布調査で表面採集されたものである。採集地は長崎遺跡で漁津ケ崎公園入口南側の畑である。1~3は福江島では数少ない旧石器時代の資料である。

**細石核**(1) 黒色黒曜石を石材として,幅0.7cm,長さ3.0cm前後の細石刃が剝離されたと考えられる。両側面と打面に調整が施されている。

三稜尖頭器( $2 \cdot 3$ ) 2 は青灰色黒曜石製。二面に急傾斜の剝離を行なっているが裏面は加工を施さない。重さ $17.8\,\mathrm{g}$ 。 3 は大形で、三面に荒い調整を行なっている。重さ $40.5\,\mathrm{g}$ 。

尖頭器石器  $(4 \cdot 5)$  ともに玄武岩製。全体にパテナがみられる。 4 は丁寧な剝離調整により 細長い尖頭部を作り出している。5.18。 5 は周辺を片面から剝離調整している。5.08。

スクレイパー( $6 \cdot 7$ ) ともに玄武岩製。6 は大形で厚手のものである。一側辺を両面から刃部加工している。もう一方の側辺には自然面が残る。50.08。7 は簡単な加工で刃部を作る。

石 鏃 $(8\sim16)$  8は一般に鍬形鏃とよばれるもので,U字形の大きな抉りと角状の脚部を持っ。縄文時代早期の指標的な石鏃である。9は小形で正三角形に近く,浅い抉りを持つ。調整は周辺のみを両面から行なうため主要剝離面がみられる。10は局部磨製石鏃。小形で両脚部を破損している。二側辺は鋸歯状になっており非常に丁寧に作られている。 $11\sim16$ は大形の石鏃で破損の大きなものを除くと,長さ3.0cm以上,重さもほとんど3.5g以上である。

**石 匙**  $(17\sim19)$  3点ともサヌカイトを石材としている。 $17\sim19$ は横型石匙であるが、 $17\cdot18$  は周辺を両面から刃部加工しているのに対し、19は片面の加工である。

# III ま と め

寄神貝塚周辺遺跡は,畑地に黒曜石片が多く見られる遺物散布地であった。しかし,調査に入ると遺物が散布しているのは表土のみで,本来遺物包含層だと考えられるII 層からの出土遺物は2 点と極端に少なかった。遺跡付近一帯は畑地として利用されてきており,遺物包含層は耕作などにより,ほとんど削られたと思われる。特に,今回調査した地区は,台地上でも標高が比較的高くなっている部分で,土層も浅かった。ただ,A-2 区・A-3 区は土層の堆積が厚く,旧地形を推定できた。また,A-3 区II 層には石皿が出土しており,標高の低い部分での遺物包含層の存在を感じさせる。

遺物については、出土点数に比べると器種が豊富であった。特に、福江島では珍しいナイフ 形石器や細石核は、五島の旧石器時代を知るための良い資料となるだろう。他には石鏃や石槍 石銛などの生産用具・磨製石斧もみられた。

包含層・遺構は検出されず、土器も小片が1点のみのため詳細はわからないが、遺物からみて旧石器時代から縄文時代早期までの痕跡はうかがえる。遺物の散布も表面のみであるので、 工事に入ってもさしつかえないという結論に達した。

図版1



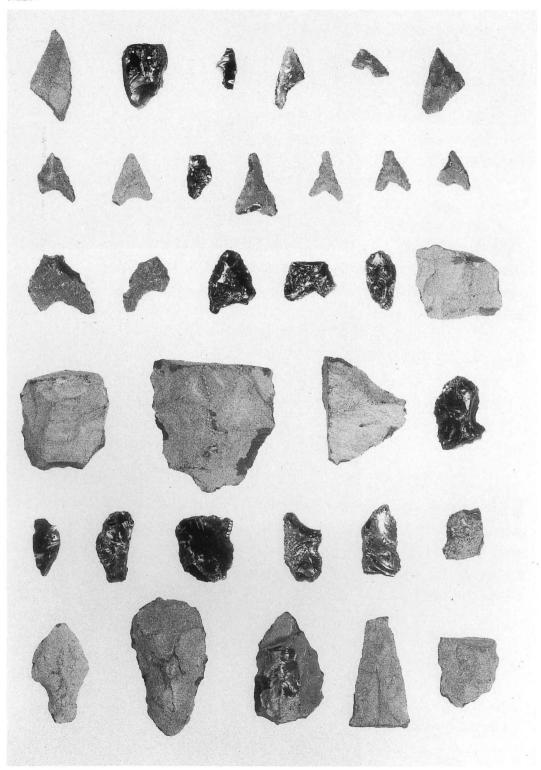
遺跡遠景(城ノ岳より)



遺跡近景(北より)

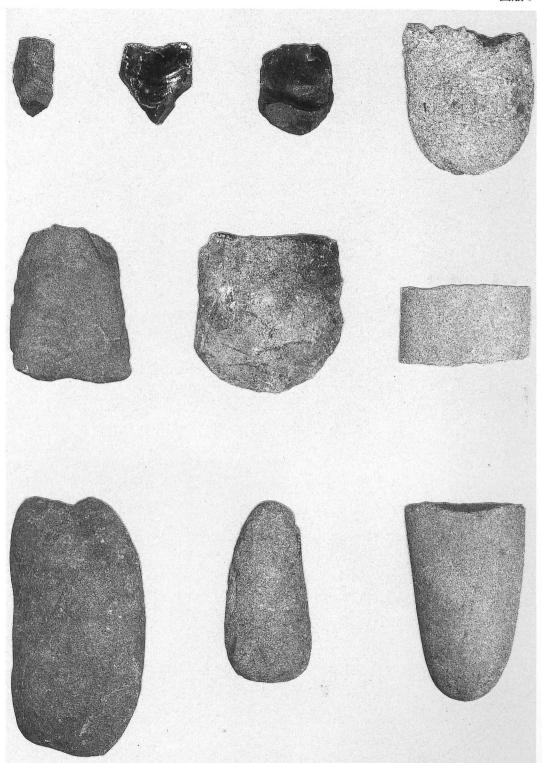


C-4区 北壁

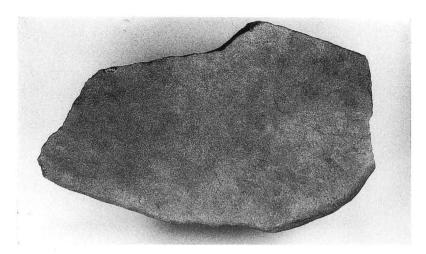


出 土 石 器(2/3)

図版 3



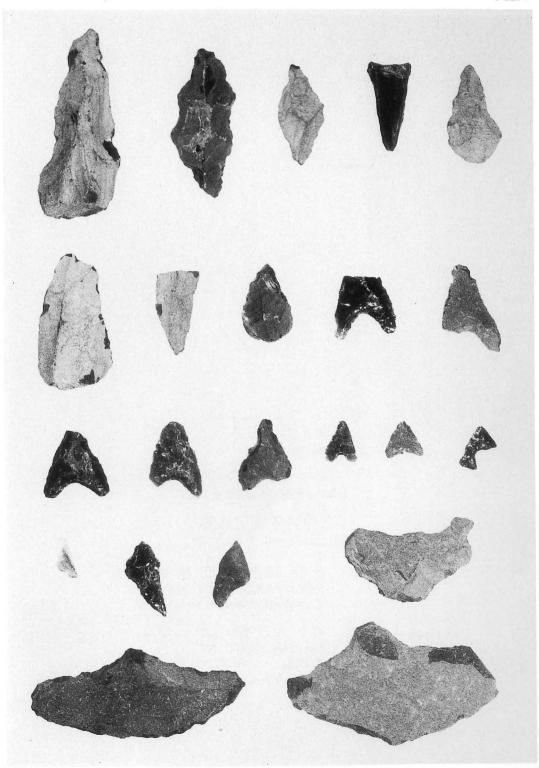
出 土 石 器(2/3)



出土石器(1/3)



出土土器(2/1)



岐宿町内表面採集資料(2/3)

## 岐宿町文化財調査報告書第2集

# 寄神貝塚周辺遺跡

平成 2 年 (1990) 3 月31日発行

発行所 岐宿町教育委員会

長崎県南松浦郡岐宿町岐宿郷2535番地

**〒** 853−07 **☎**0959−82−1111

印刷所 昭 和 堂 印 刷

長崎県諫早市長野町1007

**〒** 854 **☎**0957─22─6000